

■（１８０）「２枚目の名刺」がはぐくんだ地元への愛

東京・多摩地方で催された少年サッカーチームの創立３０年記念行事に出席した。長男の加入で関わりをもち始めてからすでに１５年。地方への転勤で離れる期間も何回かあったが、チームの歴史の半分の時間を、親として素人コーチとして楽しんできた。

「２枚目の名刺を持とう」。先輩記者が会社内でよく勧めていた。深夜から未明におよぶ編集作業や曜日に関係なく必要となる取材……。新聞記者の生活リズムは不規則で、周囲の人々とずれてしまうことが多い。その結果、社会の動きを知っているように思われがちだが、「実際は世間知らずだ」とその先輩記者は心配していた。それだけに、記者の名刺に加えて、サッカーチームの「名刺」を持つことを歓迎してくれた。活動を続けるにつれ、地域の知り合いが増え、近所の居酒屋で深夜までサッカー談義を続けた。たまたま自宅を構えた縁もゆかりもなかった東京郊外のまちに、一気に愛着を持つようになった。

被災地では、自ら被災しながら、ボランティアという「２枚目の名刺」を持つ人もいる。こちらは地元愛が出発点だ。その思いを新聞紙面で後押ししたいと改めて思った。（山）